【塼仏　夏見廃寺出土の大型多尊塼仏を中心に】

蔵持市民センター　自主講座　　2022 年 9 月 15 日

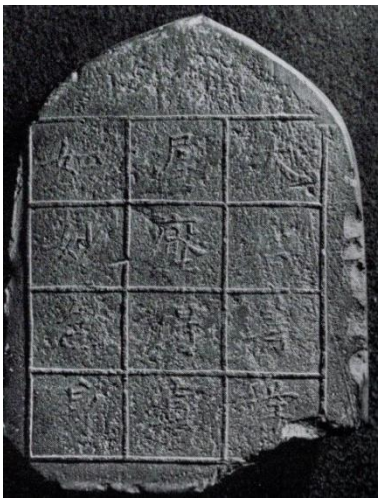
名張歴史読書会　会長　高見省三

塼仏とは　　インドから中国に持ち込んだ玄蔵三蔵と最期の地

制作方法は、塼が古代中国で作られていた煉瓦の一種を意味するように、あらかじめ制作しておいた凹型に粘土を押し当てて形をとり、乾燥、焼成する。木像や石像と異なり、大量生産に向くメリットがある。『ウィキペディア（Wikipedia)』による
中国に持ち込んだのが玄奘三蔵で、インドに旅し、インドで成作方法に出会い、中国に持ち帰った。
それが長安（今の西安）で、玄奘三蔵が建てた大雁塔の周辺で大量に出土
日本から遣唐使の一行がその技法を持ち帰った。
塼仏が長安の都へ　玄奘三蔵がインドから長安（西安）に持ち帰る
陝西省の西安から北部に位置する銅川市
玄奘（洛陽の近くに生 602 年）は 629 年、唐王朝成立まもない混乱期に、出国の許可が下りず、密航として河西回廊を経て高昌国に至り、インドへの強い思いから金銭と人員の両面で援助を受け、天山南路の峠を越えて天山北路を経て中央アジアの旅から、ヒンドゥークシュ山脈を越えてインドに至った。
学問を修めた後西域南道を経て帰国、出国から 16 年を経た 645 年に、657 部の経典を長安に持ち帰った。
帰国後の玄奘は、膨大な経典の翻訳に全てを捧げた。
事業の拠点は後に大慈恩寺に移った。
経典や仏像などを保存の建物を 652 年、大慈恩寺に大雁塔が建立された。
その後、玉華宮に居を移し、翻訳作業は続行し玄奘が亡くなる直前まで続けられた。
銅川市の玉華宮は玄奘の最期の地
玉華玄奘記念館
大雁塔一帯から出土の塼仏　左（裏書）印度佛像大唐蘇常侍等共作
火頭形塼仏と呼ばれ、玄奘三蔵が招来したインド的本源を語れるもので多くは触地印（降魔印）
この印度佛像は大雁塔一帯から多く出土、蘇姓の常侍という官に就いていた人物（正五品下と考える）
他に「善業泥」佛像も出土している。

「善業泥」佛像
大雁塔周辺に出土　『慈恩伝』に玄奘は生涯一千万体の遷仏を造った。とある。
僧哲禅師伝に「毎に日々拓模泥像十万躯を造り大般若経を読む」大量制作を日課としていた。
参考　「初唐仏教美術の研究」　肥田路美　P78
大唐善業遷仏　　火頭遷仏（中尊は倚座脇侍は菩薩）大唐善業　泥壓得真　如妙化身
「善業泥」は、西安市の南郊に位置する大慈恩寺大雁塔の周辺で数多く出土。

大雁塔の建立が 650-655 とされ、このころの遺品と考えられる。



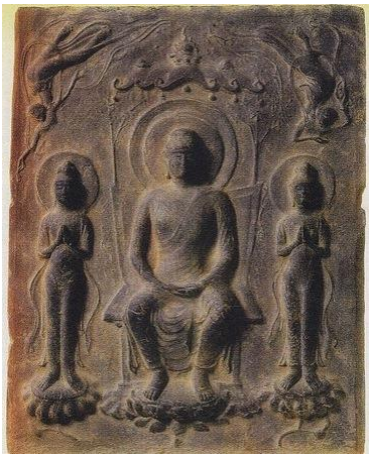
大唐善業　泥壓得真　如妙化身
だいとうぜんぎょう
でいあつとくしん　にょみょうけしん
「押出仏と塼仏」『日本の美術 3』参照

我が国の古代寺院跡だ出土する塼仏に類似した図様を持つものが数多くあり、その祖型をなすものとして注目　作風は、サールナート考古博物館所蔵の転法輪印釈迦如来坐像に代表される。インド・グプタ期のサールナート彫刻を彷彿. 指摘　大唐善業遷仏である。

参照 肥田路美「唐蘇常侍所造の「印度仏像」塼仏について」(『美術史研究』第 22 冊 1985 年)

泥を使うことは、『法華経』「方便品」の中に「或は七宝を以て成し、鍮石・赤白銅、白鑞及び鉛・錫・鉄・木及び泥或は膠漆の布を以て厳飾して仏像を作れる。」とあり、泥像は誰にでも作り出せる。
塔や仏像を礼拝するために造るだけではなく、造ること、その行為自体が祈りであり、仏の功徳にあずかり「成仏」を果たすためであった。

橘寺出土塼仏 火頭塼仏



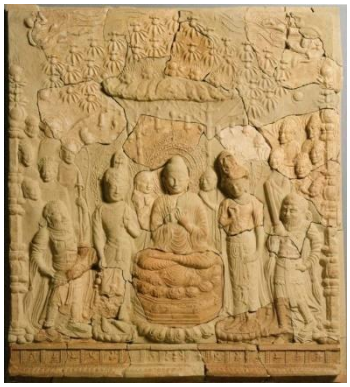
川原寺裏山遺跡出土

夏見廃寺出土　レプリカ

橘寺出土遷仏の火頭遷仏と大唐善業遷仏の類似　　天智朝後半から天武朝と考えられる
川原寺裏山遺跡出土の方形三尊塼仏と夏見廃寺出土の方形三尊仏と二光寺廃寺出土の方形三尊仏の類似

大型多尊塼仏について　　方形三尊仏の製作技術の上に大型の塼仏が作れた

夏見廃寺出土　レプリカ



二光寺廃寺出土復元

夏見廃寺の大型多尊遷仏は壁に貼り付け荘厳していた。　　厚みは１．５㎝　（釘穴がある）
二光寺廃寺で出土した大型多尊塼仏　厚み１．５～２㎝
夏見廃寺出土塼仏の京都大学収蔵の一部　　二光廃寺に比べて繊細な造像
夏見廃寺出土塼仏の京都大学収蔵の一部　獅子の一部　復元図には反映されず
夏見廃寺出土の異相の眷属　鮮明さ　迦楼羅にくぎ穴がある。復元図に反映されず。
夏見廃寺出土の大型多尊塼仏と二光寺廃寺出土との鮮明度の比較
夏見廃寺出土の大型多尊塼仏の方が鮮明度が高い。

大型多尊塼仏の多様な尊像について

復元の大きさ　縦約５５㎝、横約５３．５㎝（夏見廃寺）
　　夏見廃寺出土＋二光寺廃寺出土大型多尊塼仏　参照（『大型多尊塼仏と法隆寺金堂壁画』肥田路美）
・中央に通肩式袈裟をまとい胸元で説法印を結ぶ如来坐像
　７・８世紀で通肩で説法印をとる如来は阿弥陀如来
・左右に二比丘、二菩薩、二神将像を配す。　両脇侍が宝冠に左脇侍化仏（観音菩薩像）と右脇侍水瓶（勢至菩薩像）（左右は中尊から見て）を表すのは阿弥陀三尊像
・周囲に異相の眷属十二体を表す。（二光寺廃寺塼仏で判明）
・三尊の上部に宝蓋がかかる。背後に双樹がマンゴー形の樹葉が茂り、左右に華籠を持ち散華する天人が雲気を伴って飛翔する。
・画面の左右に火焔宝珠をのせる宝幡が立つ。
・このような仏説法の会座を表す。それが須弥壇上に表す。

他の寺院に見られる大型多尊塼仏について

唐招提寺　蔵
唐招提寺に寄進されたと考えられる中尊と、中尊・縦 27.8 ㎝　横 15.6 ㎝、厚 6.6 ㎝
　　この厚みは壁には貼り付けが向かない。
旧開山堂で出土　僧形像　縦 12.3 ㎝、横 8.0 ㎝、厚さ 4.5 ㎝
この塼仏が出土したことで、当初夏見廃寺からと思われていた中尊は、唐招提寺出土と確定。
新田部親王の屋敷にあった念持仏として唐招提寺に伝わったと思われる。

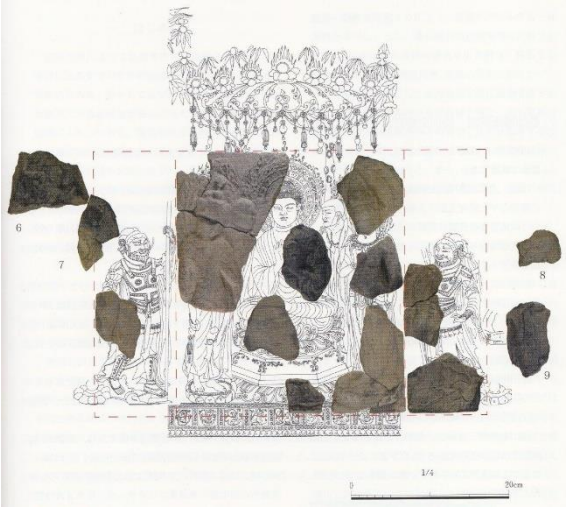
唐招提寺出土大型多尊塼仏

藤井斉成会有鄰館　蔵の天部像

伝夏見廃寺　高さ 27.5 ㎝　厚みは 5-6 ㎝ほど、唐招提寺の可能性あり、甲を着け右手に剣を執り左手を腰に当て岩上に斜め向きに立つ天部像。須弥壇部には左に五絃琵琶、その

右には横笛の奏楽天人と獅子が確認出来る。須弥壇と天部像は一体である。
天部には顎髭をたくわえ、当麻寺金堂の四天王像に酷似。天部像は草履のような鼻緒の付いた履き物。
法隆寺阿弥陀三尊像（伝橘夫人念持仏）厨子扉絵にも表されている。

枚方市　百済寺跡出土大型多尊塼仏



四分割　1，本尊と左右菩薩・左右僧形。2、右天部とその背景。3，左天部とその背景。4，天蓋部分。
左右菩薩の表現が異なる。
異なる図像
1、向かって左菩薩の頭部に水瓶の様な図
2，向かって右菩薩の頭部に宝珠の様な火頭形
3．右菩薩の瓔珞が見当たらない。
図像を変える事に分割の意味があると考えられる
参照「特別史跡百済寺跡」枚方市文化財報告書　第３節『河内百済寺跡出土塼仏雑考』中東洋行　2015.3

法隆寺　五尊塼仏

中尊阿弥陀仏像は、結跏趺坐を膝から下は改造されている。見た目にも違いが判る。

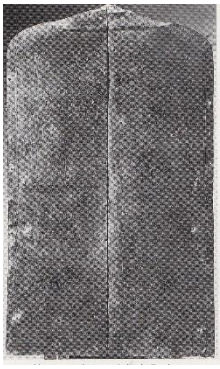
大型多尊塼仏出土寺院は１２寺に出土
森本貴文「日本の塼仏集成」『東アジア瓦研究第３号』東アジア瓦研究会 2013年 P63～P70 において、
大型多尊塼仏：中尊の左右に二菩薩立像と二比丘像を配し、その周囲に多数の眷属を従えた大型の塼仏である。その出土地や伝来地は現在１２箇所になる。
「夏見廃寺」「二光寺廃寺」「法隆寺」「唐招提寺」「法堂寺廃寺」「乙訓寺」「興福寺」「藤原宮跡」「石光寺」「当麻寺」「安部寺跡」「百済寺跡」
同じ尊像の塼仏が判っているだけで１２寺ある。これだけの数は国家による造像が考えられる。

存在する寺伽藍縁起幷流紀資財帳
大安寺伽藍縁起幷流紀資財帳　金光明経一部八巻　右飛鳥浄御原宮御宇　天皇以甲午年請座者
法隆寺伽藍縁起幷流紀資財帳　金光明経一部八巻　右甲午年飛鳥浄御原宮御宇　天皇請座者
二寺にある流紀資財帳に６９４年に金光明経が飛鳥浄御原宮御宇　天皇　持統天皇の事
持統天皇より金光明経一部八巻が収められる。

金光明経について
　サンスクリット語で書かれた。曇無讖（中インド出身　中国に来た）翻訳
412-421 年に四巻本
６世紀に五巻本、六巻本、七巻本、八巻本に、８世紀には十巻に増えた。
護国思想が深く、この経を広めまた読誦して正法をもって国王が施政すれば国は豊かになる。
そして、罪過を懺悔で自らの悪行が滅じ、国家の救済と国家の安泰まで説かれた。

推古天皇から伝来と思われる。天武５年以降度々護国経典とし日本書紀に現われる。
護国経典三部経　『法華経』『仁王経』『金光明経』
『仁王経』鳩摩羅什訳　天皇の一代一度　六世紀より『法華経』全ての人間が一乗（菩薩乗）を通じて平等に救済されるという仏教思想　聖徳太子からある

法隆寺献納　銅板押出仏像　塼仏では無いが銅板で同じ画像がある。



法隆寺館　法隆寺献納宝物　押出阿弥陀三尊及び比丘形像
№198　東京国立博物館蔵（筆者撮影）
銅板押出仏像の光背

中尊と両脇侍と二比丘、二菩薩、二神将像及び周囲の眷属　夏見廃寺出土　京都博物館蔵

大型多尊塼仏は法隆寺金堂壁画に類似
　便利堂が活版ガラスで焼失前に撮影した画像
　一号壁画　六号壁画　　法隆寺金堂六号壁画の酷似
　九号壁画　十号壁画　　中尊の回りの諸尊が大型多尊塼仏の中尊周囲に似ている。通肩式袈裟をまとい胸元で説法印を結ぶ如来如来坐像
　六号壁の印は基本的には同様だが少し違う

大型多尊塼仏と法隆寺金堂六号壁画　　７世紀末　統一新羅の慶州雁鴨池

慶州博物館にて

中尊の結跏趺坐　降魔座　　統一新羅　７世紀末　降魔座が韓国　新羅の都城である慶州雁鴨池(月池)周邊
中国の降魔座の例　　南響堂山石窟　２窟　７窟

日本の中尊の結跏趺坐　降魔座の事例
蟹万寺　釈迦如来坐像　７後半か８世紀前半
薬師如来坐像　薬師寺　白鳳時代
当麻寺　弥勒仏坐像　　飛鳥時代
新薬師寺　薬師如来坐像　平安時代
押出仏　法隆寺館（東京国立博物館）　大型多尊塼仏

法隆寺の金堂壁画は初唐の影響
インド・中央アジア・ササーン朝等の美術の諸要素を吸収し六朝以降の造形伝統に融合した初唐の影響
敦煌莫高窟５７窟　初唐（618～712）
敦煌莫高窟 220 窟　初唐（642）　220 窟のレプリカ　新宿南口　瑠璃光苑　中尊の結跏趺坐　降魔座

脇侍の観音像
橘夫人念持仏厨子に見られる観音像
瓔珞を手に取る　観音像の素足で蓮華に乗る

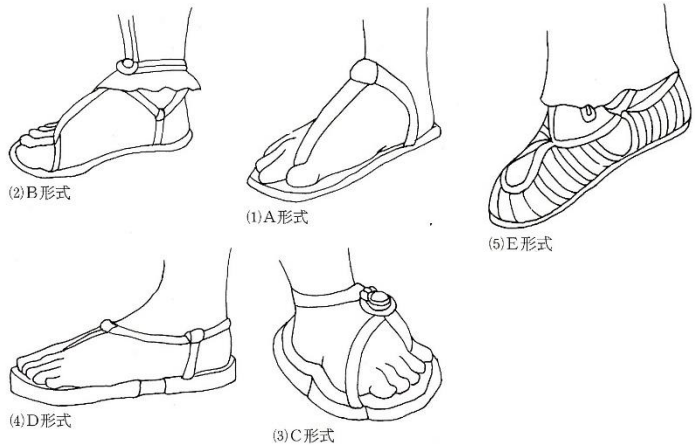
橘夫人念持仏厨子に見られる観音像　　夏見廃寺出土の観音像

観音像が瓔珞に触れる中国の例　四川省綿陽市の碧水寺磨崖造像第 19 号龕正壁

天部像　　顎鬚　草履

玉虫厨子に見られる天部像　宮殿正面扉絵
伝橘夫人念持仏厨子扉絵　（左）多聞天像・（右）増長天像
当麻寺金堂四天王像　髭

西安慈恩寺　大雁塔門柱　神将像
奈良国立博物館の白鳳展によると、この髭像は中国・朝鮮半島でも、龍門敬善寺洞（650 年頃）成都万仏寺跡出土天王像（中国国家博物館蔵 6-7 世紀）西安大雁塔門柱神将像、
韓国慶州石窟庵浮彫四天王像（8 世紀）などに同様の天部形が見られ
7～8 世紀の東アジアで広く流布していた天部の形式と考えられる。大型多尊塼仏の神将像は、当麻寺の甲のように腹前の前楯が見られない点は、より中国の原型に近い形式といえる。
草履をはく多聞天像
草履の形態
A 形式：ガンダーラ地方に多い。台部に３ケ所の緒穴を作り緒で固定ペシャーワル博物館・弥勒菩薩
（サハリ・バハロール出土 2～3 世紀）など
B 形式：敦煌壁画を含む西域。台部に前方３ケ所、後方２ケ所に穴
龍門石窟神将像、韓国石窟庵の四天王像など
C 形式：1 指２指間に緒穴、すぐ後方２ケ所、計前３ケ所後穴はない。
Ｂ形式を知らない中原の周囲で想像したか。
Ｄ形式：前緒穴第１指、2 指の間、後方左右２ヶ所。当大型多尊塼仏、興福寺阿修羅像など十大弟子像、大雁搭門框神将像、唐代の神将像（ﾒﾄﾛﾎﾟﾘﾀﾝ美術館）
夏見廃寺塼仏、二光寺廃寺塼仏の天部像
E 形式：草鞋・沓タイプ。足を覆っている。大英博物館敦煌将来の持国天・広目天像、
東大寺戒壇院厨子扉図・浄瑠璃寺吉祥天像厨子扉図神将像等
参考文献　竹下繭子「龍門石窟敬善寺洞の神将像と鼻緒履物」『仏教芸術 288』毎日新聞社 2006.9



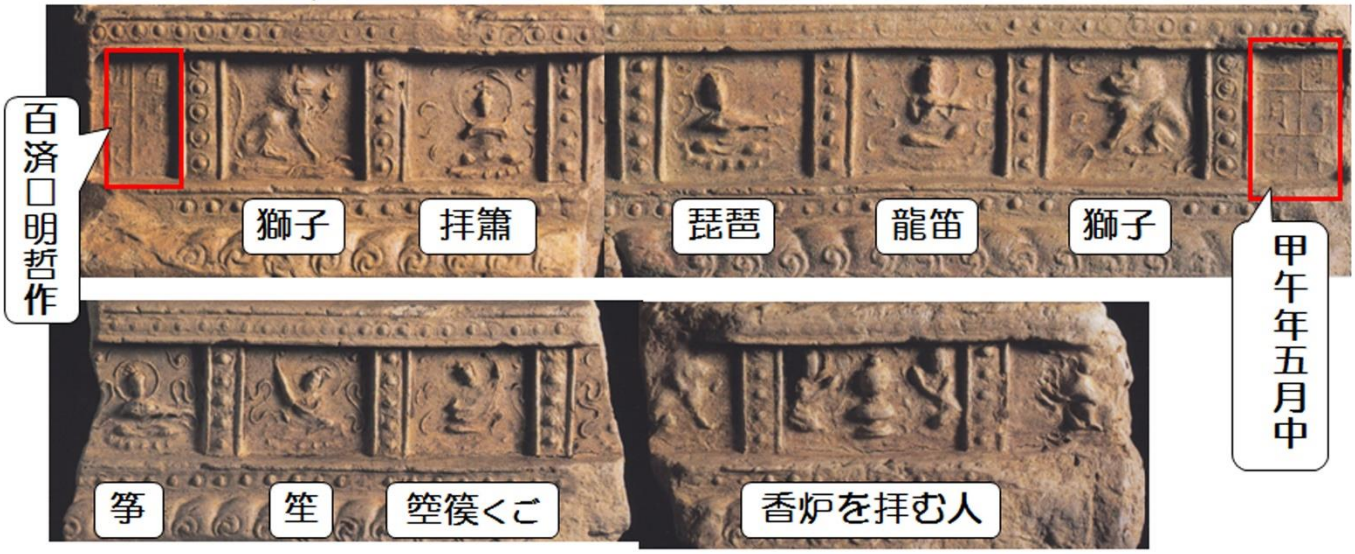
唐招提寺　開山堂発掘調査で出土　史跡唐招提寺旧境内　（発掘調査の概要　2013 年）
新田部親王の念持仏（天武天皇の子、母は五百重娘　藤原鎌足の子で大原大刀自、藤原夫人と呼ばれる）
法隆寺金堂壁画 10 号　右上の天部２体
四川省成都市　万仏寺　四天王像　6 世紀　南北朝

迦楼羅像と一対の鳥
『阿弥陀経』〔一、極楽の国土と聖衆〕（二）舎利弗よ、汝、この鳥、実にこれ罪状の所生なりとおもうことなかれ、・・もろもろの鳥、みな、これ阿弥陀仏」であると説く
聖衆：仏教で礼拝対象となる声聞，縁覚，菩薩，仏の集団を指すが，普通は浄土教で往生者を救うために来迎する仏，菩薩，比丘衆その他のお伴すべてを聖衆という。
法華経巻第六　法師功徳品第十九　迦楼羅の声、鳥（命命）などさざまな声を耳で聞く功徳
法隆寺金堂壁画の各要素と敦煌壁画の要素が取り入れられていた

須弥壇について

大型多尊塼仏の夏見廃寺と二光寺廃寺の製作の違い
夏見廃寺の須弥壇は本像（多尊塼仏）と独立　二光寺廃寺出土多尊塼仏は一体
須弥壇の上部は本尊部分と分離し、へら仕上げで生きた面を構成する。図の須弥壇は側面から見て反りが見られる。これは長い塼仏を焼くときに反り防止の「すかし」である。
余分なところを削除し、全体の均一性、ねじれ歪み、割れの防止と軽量化を図る。この技術を使った工人は、土を良く知る瓦造り、土器造りなどの専門技術者の手による作品であったと考えられる。二光寺廃寺出土は本体と一体であり、夏見廃寺で部分成作し後で全体成作したと考えられる。

夏見廃寺+二光寺廃寺多尊塼仏基壇の楽器仏



夏見廃寺出土
左、上、右とも同一の方向を変えて見ている。

須弥壇の造像（夏見廃寺出土と二光寺廃寺出土）
・香炉を拝む人を中央に左右に獅子、５種類の楽人を配す
・右端に製作年　甲午年五月中
・左端に成作者　百済王明哲作
５種の楽人
法華経：多種類の楽器　　法華経方便品二に、「華香幡蓋を以て敬心にして供養し若しくは人をして楽を作（な）さしめ鼓を撃ち角笛・螺貝を吹き　簫・笛・琴・箜篌・琵琶・鐃・銅鈸かくのごとき衆の妙音を尽く以て供養し・・・」『法華経』中村元より　　多種の楽器
金光明経：５種の楽器
大弁才天女品　第十五之一に「・・・常に安息香を焼き、五音の楽声絶えず、幡蓋荘厳し、・・・」
多尊塼仏の須弥壇は、金光明経から来たと考えられる
韓国の百済金銅大香炉（国宝）国立扶餘博物館展示

扶余・陵山里寺跡の工房跡出土　陵寺は 567 年に聖王の偉業を称えるために建てられた。1400 年余前
排簫、長簫（日本の尺八）、阮咸、太鼓、コムンゴ（琴風）
楽器は５種　そこの地域の楽器を使う

銅板法華説相図　長谷寺に伝わる
縦 83.3cm、横 75.0cm 厚さ約 2cm の比較的大型の銅板法華説相図

『法華経』見宝塔品に説かれる宝塔の出現などの光景が鋳出・押出などの金工技法で浮き彫りに。
下段の周縁部の升目の中には一体ずつ奏楽天人が線彫される。作成時期の説は多く、「奉為飛鳥清御原大宮治天下天皇」が天武天皇１５年（686）説が有力。『法華経』方便品第二に「・・・鼓を撃ち、角・貝を吹き簫・笛・琴・箜篌・琵琶・鐃・銅鈸　かくの如き衆の妙音を・・・」のように多くの楽人 16 体（現存、本来 28 体　一部欠失）三田覚之「長谷寺千仏多宝仏塔考」
大型多尊塼仏の楽器は５種　　横笛　琵琶　排簫　箜篌　笙

日本書紀の持統 8 年 5 月 11 日に諸国に金光明経百部送り届けよ毎年必ず一月の七、八日頃に、その経を読誦せよ　塼仏も一具とされたか。
作者は百済王明哲作と読める　甲午年 5 月中　は持統 8 年

大型多尊塼仏の製作とその背景
須弥壇の両端にある「甲午年五月中」「百済王明哲作」法隆寺に残る資料からの検討

僧徳聡等像造記銅板　法隆寺蔵
（表）「甲午年三月十八日鵤大寺徳聡法師　片岡王寺令弁法師　飛鳥寺弁聡法師三僧所生父母報恩敬奉観世音菩薩像　依此小善根令得无生法忍乃至六道四生俱成正覺」
（裏）「族大原博士百済在王此土王姓」
百済王氏は百済最後の王・義慈王の子である善光を始祖とし、日本の氏族。持統朝に百済王の氏姓を賜与
百済王善光は『日本書紀』持統 7 年（693）に没す。7 年正月「正廣参を以て百済王善光に賜ふ。」
百済王善光の子が前の「甲午年三月十八日鵤大寺徳聡法師　片岡王寺令弁法師　飛鳥寺弁聡法師三僧所生父母報恩敬奉観世音菩薩像」の 3 名の僧で、賢い 3 名のことを明哲と呼ぶ。複数人を呼ぶ名として懐風藻

釈道慈に中国の賢者を探すのに「明哲を歴訪し」とあり、夏見廃寺の塼仏に百済王明哲作と考えられる。
日本の大型多尊塼仏を造られた時代は大地震が発生　天武天皇・持統天皇の方針　詔
天武 13 年（684）10 月 14 日　白鳳地震　南海トラフ　日本書紀の記述　　M8～8.3
天武天皇の時代に多くの地震の記録
天武 14 年（685）3 月 27 日「諸国に家毎に仏舎を作り、仏像と経を置きて礼拝供養せよ」
　・・・これから 9 年　夏見廃寺金堂が完成（694）　　二光寺廃寺の塼仏も完成（694）
天武１３年（684）の白鳳大地震が、諸国に仏舎を造らせた

686 年 9 月 9 日（10 月 1 日）天武天皇病が癒えず崩御　　第 41 代天皇・持統天皇（鸕野讃良皇女）
　10 月 2 日　大津皇子　謀反　3 日訳語田で自害　山辺妃皇は髪を振乱し裸足で殉死

草壁皇子の死　万葉集は日並皇子
持統天皇 3 年（689 年）4 月 13 日薨御（27 歳）立太子となったと思われる。
（その子が文武天皇・25 歳死 707 年）草壁皇子は壬申の乱で最初から父天武天皇に従った。
持統天皇は夫に先立たれ、最愛の息子が死にいたたまれなくなった。大津の祟りと思ったか？
鳥谷口古墳は急遽造られたような古墳・再葬か？
ところが　日本書紀に　中臣朝臣臣麻呂・巨勢朝臣多八須　2 月 26 日に 9 人判事（大津謀反時の 2 人有）
3 月 24 日に大赦　　この時草壁は病と思われる　急遽大津の屍を移葬したと思われる。二上山　山麓

持統８年（694）この年は甲午年 5 月 11 日　金光明経 1 百部をもって諸国に送る。
必ず年毎の正月の上玄に読め　　毎月必　1 月の 7 日、8 日頃に読め　　供養料は正税を当てよ
見廃寺の塼仏記述日　二光寺廃寺出土と併せて　甲午年五月中　夏見廃寺金堂はこの年には完成
この年の 12 月 6 日　藤原宮に遷都

法隆寺金堂壁画について　　6 号壁など

金堂壁画内陣「飛天図」に凹みの痕跡が見られ、念紙法、押圧線引法で転写された可能性が指摘された。
屈鉄盤糸と表現された鉄線描で描かれ、大正時代に瀧精一は『歴代名画記』にあるホータンの尉遲乙僧の画風と着目。1953 年太田英蔵の「法隆寺壁画の錦文とその年代」で高宗中期から武周朝前期（670-690）に緯錦（よこにしき）が見られ上限は」680 年代をさかのぼらないとされた。
壁画は経錦（たてにしき）今日では持統朝（686-697）とする見解が主流

尉遲乙僧はホータン国（新疆ウイグル自治区）出身の唐代の画家　　ダンダンウイリク出土品
屈鉄盤糸と表現された　鉄線描である。法隆寺金堂壁画と同じ画法

右側
ダンダンウイリク

持統天皇の伊勢巡幸の(692)後に 694 年に大型多尊塼仏が飾られた夏見廃寺金堂は建立出来た。
この年に藤原京に遷都

付論
薬師寺縁起に大来皇女神亀二年（725）清御原天皇の奉為に昌福寺建立　大来は 702 年に死
託基皇女は天武天皇の采女の孫に当たる　夏見廃寺は金堂が 694 年に完成し、後に塔と講堂が出来た
一品　託基皇女の役割　天武天皇の皇女で 751 死
『伊賀国夏見郷刀禰解案』に蔵持に八十町の墾田があった。

主な参照資料

名張市史　資料編　考古
名張市郷土資料館　　夏見廃寺資料館
『日本書紀』日本古典文学大系　岩波書店
『日本書紀』上下全現代語訳　講談社学術文庫
『古事記』倉野憲司校注　岩波書店　1964.1
『古事記』中村啓信　角川ソフィア文庫　2009.9
『日本古代史料学』東野治之　岩波書店　2005.3
『懐風藻』江口孝夫　講談社学術文庫　2000.10
『塼仏の来た道』白鳳期仏教受容の様相 後藤宗俊　思文閣出版 2008. 11
『初唐仏教美術の研究』　肥田路美　中央公論美術出版　2011.12
「大型多尊塼仏と法隆寺金堂壁画」　『古代寺院の芸術世界』肥田路美　竹林舎　2015.9
『大津の都と白鳳寺院』企画展　大津市歴史博物館　2017.11
「押出仏と塼仏」『日本の美術 3』久野健　至文堂　1976.3
『法華経』中村元　東京書店　2003.4
『金光明経』壬生台舜　大蔵出版　1987.7
「龍門石窟敬善寺洞の神将像と鼻緒履物」『仏教芸術 288』竹下繭子　毎日新聞社 2006　他